



未来を創る財団

Newsletter MIRAI
(future)

*"A brighter future for
the next generation"*

みらい

No.13 Jul 2017

The Outlook Foundation

テーマ 高校生の卒業論文－立教女学院の場合

高橋 育子

立教女学院中学校・高等学校
教諭（国語科） ARE 学習主任

近年、講義スタイルの知識詰め込み型学習ではなく、アクティブ・ラーニングに代表される、自ら調べ、探究するスタイルの学習形態が注目を集めています。2020年度から導入される大学入学共通テストや文部科学省が200校の認定を目指す国際バカロレアなどの新しい教育制度の到来が、その流れに拍車を掛けています。これらの新しい制度に繋がる学びとして、中等教育における卒業論文への関心が一層高まっています。そこで卒業論文制度及びその可能性について、立教女学院中学校・高等学校の事例を、以下にご紹介いたします。



高等学校全景（昭和5年竣工）

本校では、生徒の問題提起能力・自己解決能力を培う試みに様々な形で積極的に取り組んでおり、その一つが2000年度より導入した「ARE」と総称する、6年間にわたる一連の授業・体験群です。これは本校の教育が目指す三つの力「ASK」＝課題設定力、「RESEACH」＝調査研究力、「EXPRESS」＝表現発表力、の頭文字をとったもので、卒業論文は中高6年間のARE学習における最終形態として位置づけられています。2003年からは卒業論文への取り組みを始め、本年で15年目を迎えました。

中学校ARE学習

まず土台となる中学校段階では、文系理系様々な分野を広く学び、興味関心を広げるよ

う努めています。具体的な材料を基に、調査を行い、議論を深め、発表を行います。これらを中学校一年時から段階的に繰り返していくことで「思考力」の土台を培います。

調査にあたっては、やみくもに調べるのではなく、まず研究計画書を作成し、仮説を立て、分類・整理をし、因果関係などを考慮した上で臨んでいます。そして、図書・新聞・インターネットなど様々な手段で情報収集する他に、実際に野外観察・現地訪問・博物館見学や当事者・専門家へのインタビューなども行っています。

発表手段はレポート、掲示資料作成、口頭発表と様々な手法を用いますが、意見構築の際には論拠を明示することを意識しています。グループで意見を出し合う機会においては、個人でなく複数の意見をまとめるとはどのようなことなのかを体験します。話し合いを経て、生徒達自身が資料や各自の意見の長短を見抜く客観性を培っていきます。また発表をすることは、発表者の表現力を磨くだけではなく、聴衆の聴く力を養い、他者の異なる意見を知り、新しい知見を得る有益な機会にもなります。

中学校では、その他の教科の授業においても、AREの手法を取り入れることを意識しています。近年は論文制度を導入する学校も少なくありませんが、中学校からのしっかりとした土台を持つことが本校の特色です。

高等学校ARE学習

高等学校では、中学校3年間で培った「課題設定力」「調査研究力」「表現発表力」を実際に卒業論文という形で体現していきます。高校1、2年生では上級生の発表を聞く、資料を調べる、テーマを考える、などの準備期間に当て、実際の卒業論文執筆は3年生からの約1年間で集中して書き上げます。

3年次には、週2時間の選択科目「ARE」の授業を設けています。毎年100～120名が履修しており、半数以上の生徒が原稿用紙100枚以上を執筆しています。実際の授業は、1クラス17名程度で構成され、6～7クラス編成です。毎回担当教員との面談のほか、「カルテ」(生徒は進捗状況や質問事項を、教員はそれに対するコメントを記入)をやりとりします。また、毎回課される小課題を考察することを通



して、少しずつ全体が見渡せるようになり、論文の完成へと向かいます。

その後は徹底的に調査を進め、多くの情報の中から何が信頼できるか、なぜそれが正しいと思うか、根拠を持って判断する力を培います。また物事を多面的に見ること、特に反論への顧慮や反対の立場からも目を向けることも心がけています。

テーマ設定の重要性

卒業論文指導では、特に「課題設定力」を大切にしています。現実社会では、常に誰かが課題を与えてくれるわけではありません。自ら疑問点・問題点を発見できる能力は、今後ますます要請されるでしょう。またそのことは、解決の糸口を見出す力にも繋がります。

さらには、興味のあるテーマを探究することは、「何を知りたいのか」「それをどう考えるか」を通して、自分という人間の再発見や深化にも繋がります。そのため、課題設定には十分時間をかけています。論文を執筆する上でテーマ制限を設ける学校もありますが、

本校ではそれらを意図して自由に設定しています。中学校 ARE や土曜集会などで多様な世界に目を向けてきたこともあり、身近な問題、時事問題から普遍的な課題まで幅広い分野、ユニークな視点を持ったテーマが多いことも特徴です。例えば、2016 年度のあるクラスのテーマ一覧は、以下の通りです。

プロ野球において地方球団の人気の上昇している理由
ハローキティの二次元と三次元のギャップが大きい理由
現代の若者を惹き付けるラジオの魅力
日本で今でもCDが売れる理由
ゆとり教育が失敗とされた理由
近年古着の市場規模が拡大した理由
伊勢丹新宿店が経営不振から脱却した理由
メイド喫茶が秋葉原で根付いた理由
日本のマジックがエンターティメントとして一部門を確立できない理由
商品パッケージや企業のロゴマークに青色を利用する理由
日本で死刑を極刑とし、絶対的終身刑を導入しない理由
寿司産業の製造・販売におけるシステム化の背景と効果
若者言葉が使用される理由
アップル社が市場における敗北者にならない理由
日本において、企業がスポーツを通じた社会貢献を行う理由
17・18世紀においてカストラートが大流行した理由
訪日中国人観光客が急増している理由
アフリカにジェンダー・ギャップ指数ランキングで下位の国々が集中している理由
バレエ・リュスが「伝説のバレエ団」と呼ばれている理由
ヒーロー映画において多くの女性ヒーローが誕生した理由
コンビニエンスストアでレジ袋が有料化されない理由
訪日外国人が居酒屋を訪れる理由
週刊少年ジャンプが漫画誌販売部数首位を維持している理由
児童虐待相談対応件数が年々増加し続けている理由
箱根駅伝がマラソンでの活躍に繋がらないと報道される理由
ラグビー南アフリカ共和国代表に肯定的差別が必要とされる理由

協働性を培う

これらのテーマは生徒間で情報交換し合う、ディスカッションを重ねるなど、自分以外の視点からの学びや協働性を大切にしています。他者からの新しい気付きは、自分の世界を広げる上で欠かせないものであり、協働性を培うことは、社会への扉を開く上で極めて重要なものでもあるからです。

最終的には、文章による論文、また PowerPoint を用いたプレゼンテーションという二

形態で発表を行います。10分間の最終プレゼンテーション時には、聴き手側も発表をただ聴くだけではなく、コメントカードを記入します。このコメントは良い点だけでなく、必ず改善点も記入しています。発表者にとって、自分の発表が聴き手にどう伝わっているかを客観的に知ることや、自分では気付かない指摘を受けることは、今後に繋がる重要なことだからです。聴き手側にとっても、発表を聴く力、コメントを書く力を養う良い機会となっております。さらには仲間のプレゼンテーションを聴くことは、多彩なジャンルに対する知見を深め、知的好奇心を一層広げることにもなり、ここにも双方向性が生まれます。それだけではなく、一つの物事には膨大な背景や脈絡があることを自分自身の論文執筆を通して身をもって知った生徒たちは、他者のテーマの裏側にも同様の積み重ねがあることを理解します。そして、今まで何気なく読んでいた教科書や書籍のたった1行の記述には何と多くの物事が隠れているのかということにも気づかされ、世界を大きく開いていくことにも繋がっていくのです。

論文執筆を通して

執筆の終盤には、どの生徒も皆知ることの楽しさに目を輝かせています。何もないところから、本を読み、調べ、考え、書く、という地道な作業を積み重ねた結果を「論文」という形として完成させたことに、大きな達成感を抱くだけではなく、自己に対する自信にもなっていきます。そして、調査や思考を重ねた先に、当初の予想をはるかに超えたものを見出していきます。そこから、学ぶことの本当の意味や喜びを理解するのです。卒業論文を執筆した経験、その一つひとつの作業が確実に今自分という人間の一部となり、成長できたことを、実感します。実際に論文執筆を終えた生徒の感想をいくつか御紹介します。

「問いを自分で立てて、それを追求していくということは、本来学問のあるべき姿勢だと思います。ずっと小学生のときから、与えられた知識をただ覚え、与えられた問いに答え、学問を『させられている』と感じていました。今回の論文は『どうして勉強しなきゃいけないの?』という、ずっと持ち続けてきた疑問に対して答えを自分で見出すことができた良い体験でした。知りたいから調べるし、学びたいから学ぶのだと実感しました。このことは、他人から言われても綺麗事に聞こえますが、それを実際に自分自身で感じる事ができたことが、すごいと思います。」

「ARE 論文を6年間の最後を書く意味を、今回の論文を通してわかった。論文は6年間立教女学院で学んできたことの集大成で、それを発揮する場だと思う。私の論文には震災や原発の情報が必要だった。そのため、2011年以降震災や原発に関する講演が続いていた、土曜集会の存在は非常に大きかった。過去の講演の土曜集会ノートを見返したりして情報を得たり、自分の考察を確立させることができた。それまで、土曜集会が面倒だと思っていただけ、その面倒な積み重ねが最後に論文という形で生かしたことは嬉しい。日本史や現代社会で学んだ知識も論文を執筆するにあたり必要だった。授業で得た知識が土台となって、論文で自分の考えが生まれたりすることを実感した。中学生から受けていたAREの授業も情報収集する面で本当に役立った。新聞記事のスクラップをして自分の意見を述

べる課題や調べ学習をして模造紙に書く課題、聖書のレポートの際は、必ず本を使うように言われた。当時から本を利用することで、論文の時は本に対する抵抗はなかったし、今必要としている情報は何かと考える習慣がついていた。AREの授業の素晴らしさに遅いながらも気づくことができた。また、公的機関に取材交渉することは本当に苦だったが勇気を出して行動に移せたのは、部長を務めて様々な困難を乗り越えて来たからだと思う。6年間の集大成は大学受験だよ、と友人に言われたことがあるが、私にとってはこのARE論文だと強く思う。」

ARE 学習・卒業論文 2016年度
第12集

卒業論文3年間の歩み	松 元 紀子(管理) …… 1
宮川賢治が『藤沢漁師の地』を大きく書き替えた理由	3年5組 元田 聖輝 …… 3
心づくに込める日本人の芸術家の気質	3年6組 松本 九子 …… 53
日本の対外活動として、輸出動物の目を導入しない理由	3年5組 金子 京 …… 111
マアサヒにシミュレーション・ゲームを複数ランダムで 下駄の両側から使っている理由	3年5組 西村 彩乃 …… 149
特徴的な個性が活かされている理由	3年6組 橋本 実友 …… 217
卒業論文の要約	…………… 250
各組メンターマ 語	…………… 259
論文執筆後の進路	…………… 263
あとがき(から)	…………… 265
編集後記	…………… 267

立教女学院高等学校

優秀論文を掲載した卒業論文集は、年度末には高校生全員に配布されます。高1、高2の段階では年一回、先輩のプレゼンテーションを聞く機会もあります。先輩達の論文やプレゼンテーションは後輩達の知的好奇心をかき立てる絶好の機会となっており、その積み重ねが学年全体、ひいては学校全体の「考える力」の向上にも繋がっています。

そればかりでなく、論文が実社会と繋がっていった事例もありました。論文を読まれた市立美術館館長がその中で提案された方法を取り入れた事例、大手広告代理店において人権問題の研修資料として本校の論文を活用した事例、また大手メーカーにおいても役員を始め、開発を担当する100名を超える社員に配布され、読まれた事例もありました。教育関係者のみならず実社会にもインパクトを与えています。

年度末には受験生や教育関係者向け公開行事として「卒業論文発表会」を開催しています。卒業論文を生徒が発表するほか、就職活動を終えた大学4年生、社会人となった卒業生が、大学や社会に出てから論文執筆経験がどのように自分を支えてくれたか、という話をします。ある卒業生は論文で取り上げたことがそのまま職業選択に結びつきました。またある卒業生は、夢中になって論文に打ち込み、書き上げた体験が大きな自信となり、その後の人生においても、厳しい環境でも逃げ出さずにしっかりと向き合うことに繋がり、あえて難しい道をも選択できるようになった、と語っています。



論文教育の可能性

この学びは、長い人生で体験することのほんの入口であるに過ぎません。ここで取り上げるテーマが直接大学の専攻や生涯の仕事に結びつく人ばかりではありませんが、その過程で学んだ様々な経験が、確かな自信、自己肯定感として、大学や社会で確固たる意識を持って力強く生きることに繋がっています。

今後、より一層時代の変化が早くなり、知識もすぐに古くなり、役に立つと思って学んだ事柄も、いつまで使うことができるか誰にも予測できません。そのような時に、何もないところから問いを立て、やわらかい頭で学際的に物事を捉え、仲間との協働性の中から様々な解を考えた経験があることは、今後の社会を生き抜く上で大きなアドバンテージとなるのではないのでしょうか。実際にある生徒は、論文のあとがきに以下の言葉を記しています。

「私達は、これから拡大するグローバル社会と人口が減少していく日本社会の双方に立脚しながら生きていかなければならない。その二つの事象が交錯する時、多くの複雑な社会的課題に直面するのではないだろうか。将来、私が一人の女性として、それらの課題に立ち向かっていく時、この論文作成で得たものが基礎となってくれるのではないかと予感している。」

浅くしか根を張っていない草木はすぐに日照りで枯れ、洪水にも流されてしまいます。しかし、しっかりと根を張っていれば、そのような苦難に耐え、葉を茂らせ、花を咲かせ、実を結びます。その葉や花や実は人を喜ばせ、役立ち、また次の世代へ種を繋いでいくことにもなります。卒業論文は、社会に出て枝や葉を茂らせる前に根を張る、つまり人としてしっかりと土台を築く作業だと言えます。学び合い、考え抜くことを通して、想定外のものをも生み出し、発展させる土台作りができる、そのような意味で卒業論文執筆は大きな可能性を持つ教育だと言えるのではないのでしょうか。そして、このような人材を世に送り出すことが、教育の大きな役割の一つでもあると考えています。

またもう一つの役割は、その身に付けた力の使い方についてです。知識は獲得すること自体ではなく、何のため、誰のためにどのように使うかということが真に重要です。AI時代の到来が指摘されてから久しく、教育や学校のあり方が一層問われる時代に入ってきました。知識の多さ・幅広さではAIには叶いませんが、どのような知識もそれを使うのは最終的には人であり、またその対象も人であるので、そこにはどうしても人間にしかない能力が必要とされるのではないのでしょうか。そういった意味で人間対人間の場である中等教育学校が、このような力を磨く場として今後も機能していかなくてはならないと考えます。AIではなく、人間だからこそできる課題設定や問題解決があるはずです。

特に本校では、全ての教室に「知る力と見抜く力とを身につけて、あなたがたの愛がますます豊かになり、本当に重要なことを見分けられますように」（新約聖書：フィリピの信徒への手紙）という言葉掲げています。まさに知識を得るだけでなく、情報の真偽を見抜く力を得て、それを温かな血の通った人間として他者や社会のために還元できる人を育てたいという信念のもと、教育を行っています。中等教育における論文教育が、最終的

には、1人の人間として血の通ったあたたかな配慮を持って、広く社会のために働くことができる能力を養うことに繋がっていくことを切に願ってやみません。

最後になりますが、今年度も2018年3月10日(土)には生徒及び卒業生による卒業論文発表会が行われます。生徒による発表を通して、中等教育課程における論文教育の可能性を皆様にお伝えできると思います。詳細は2月頃本校ホームページに掲載いたしますので、ご興味がおありの方は、ぜひ御来校頂けましたら幸いです。

T

執筆者紹介：高橋 育子

立教女学院中学校・高等学校
教諭(国語科) ARE 学習主任

お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後
期課程単位取得退学



当財団では、第一線で活動される気鋭の執筆者に依頼し、時代を拓く提案、提言をニュースレターとして発信しています。ご意見をおよせください。

一般財団法人 未来を創る財団：abrighterfuture@theoutlook-foundation.org

<http://www.theoutlook-foundation.org>